



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	犯罪, 警察, サモスード : ロシア革命下ペトログラードの社会史への一試論
Author(s)	長谷川, 毅; Hasegawa, Tsuyoshi
Citation	スラヴ研究, 34, 27-55
Issue Date	1987
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5164
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113271.pdf



犯罪，警察，サモスード

—— ロシア革命下ペトログラードの社会史への一試論 ——

長谷川 毅

ロシア革命の研究に長年従事していて一つ気になることがある。それは歴史家の描くロシア革命像が、しばしば文学や回想録に現れるロシア革命像とあまりにもかけ離れていることである。たとえばパステルナークの『ドクトル・ジヴァゴ』とかトリーフォノフの『老人』などに描かれているロシア革命の叙述に、読者は凄まじい混乱と暴力に満ちた社会を感じる。それは文学者の想像力と回想者の直接の体験が捉えた生々しい現実の一部である。ところが歴史家は対象を一定の距離を持って眺め、過去の事件に理性的な判断をくだして説明づけなければならない。歴史を流れる大きな潮流の前に、文学者や回想者の目には重要と思われる事件も、単なる逸話にすぎないとして捨て去られる事が多い。

ロシア革命の研究は長いあいだ、それが革命を推進する側であれ、反対する側であれ、指導的な役割を果たしたエリートの思想や行動に偏っていた。これに対して、1970年代以降、西欧でも日本でも新しい研究の波が現れ、今まで奇妙にもあまり本格的に分析されていなかった大衆運動が研究の焦点になりつつある。斬新なアプローチと問題意識を持ち、新しい資料を駆使したこのような研究は、労働者、兵士、水兵、農民の運動や辺境における革命の過程を詳細に明らかにしている¹⁾。この新しい波の特徴は、ロシア革命への社会史的アプローチであるといえよう。しかしこのようなすぐれた社会史的研究と言えども、冒頭に述べた私の違和感を払拭するに足るものではない。

数年前の『アメリカ史学評論』に載った論文のなかで、ミシガン大学のロナルド・スーニーは、ロシア革命の社会史の特徴はそれが「出生率や死亡率のパターンよりも様々な階級の運動に主たる関心を寄せていることにある」と述べ、「歴史から政治を取り除いた歴史」という社会史の概念はロシア革命の社会史にはありえないと主張している。したがってまさに大衆運動と政治との関わりあいに関心を当てた新しい波の社会史家は、スーニーから当然高い評価を受けている²⁾。しかし、社会史のこのような狭い定義の仕方は、直接政治的な重要性を持たない様々な社会の側面を捨象してしまい、分析の対象外に置いてしまう。つまり文学者や回想録の著者が直感的に感じた革命の像は、歴史の論理から見て重要性がないと一蹴されてしまうのである。しかも政治から出発する社会史は、その狭い視野の故に通常、政治の外に置かれる社会生活の様々な側面にまでいかに政治が浸透していたかという側面を見失ってしまう。すなわち、スーニーの提唱する社会史は「歴史から政治を取り除いた歴史」という社会史の概念を否定することによって、逆に政治の過小評価へと導かれるのである³⁾。

本論はロシア革命下のペトログラードにおける犯罪と社会の関係を分析することによっ

て、ロシア革命の社会史への第一歩とすることを試みたものである。二月革命の後、ペトログラードでは犯罪率が急激に上昇した。単に犯罪の数が増えたのみでなく、犯罪の内容も著しく残忍なものになっていった。新しく創設された民警（милиция）はこのように増加した犯罪に対処しえず、一般市民は自己の安全と財産を自らの手で守らねばならなかった。従って犯罪は、1917年のペトログラードにおいて社会秩序の崩壊をもたらした最も重要な原因の一つであると言える。

この問題を分析するにあたり資料の問題がある。1917年において社会秩序の混乱と共に犯罪統計の収集も不可能に陥った。従来法務省から出版されていた詳細な犯罪統計も、1917年に1913年分の統計が出たきりで断絶してしまった。犯罪に関する重要な月刊誌であった『警察報知』〔*Вестник Полиции*〕も、旧体制下の警察の崩壊と共に発行が停止された。おそらくソ連のアルヒーフには犯罪に関する豊富な史料が収められていると思われるが、筆者のこれに関するアルヒーフ使用の要請は拒否された。ソ連において犯罪に関するアルヒーフを利用した革命の研究は皆無であり、また西欧においてもソ連においてもロシア革命時の犯罪の研究は存在しない。従ってこの研究は全く無から出発しなければならぬ。しかし史料が全くない訳ではない。この時期に発行された新聞、とりわけ所謂ブルバード新聞と呼ばれる大衆新聞には、犯罪に関する様々な記事が掲載されている。従来このような大衆新聞は歴史的史料として無視されてきたが、これらの記事を注意深く分析すれば、かなり興味深い革命の一側面が明らかにされるのである⁴⁾。

本論の目的は、過去二回のソ連留学の際に利用した各種の新聞を基礎にして、急速に蔓延する犯罪がいかに市民生活を脅かすに至ったか、また様々な組織や様々な階層の市民がいかにこの危機に対処したかを検討するものである。この社会史への一試論が、文学者と歴史家のあまりにも隔った革命像を多少とも近づける事ができれば幸いである。

I. 犯罪の種類

1. 第一次世界大戦中の犯罪率と二月革命

一般的に言えば、第一次世界大戦中のロシア帝国の都市、とりわけペトログラードは、犯罪率の低い安全な都市であったとすることができる。表1は1914年と1915年に帝国の主要な都市に起こった犯罪の種類と件数を示している。第一位は窃盗で、次に横領、ゆすり、詐欺など経済的な犯罪が続いている。強盗、殺人、放火などの犯罪はそれぞれ9位、10位、15位と、19の犯罪の種類の中では低い位置にある。帝国一の人口数と経済力を誇るペトログラードは、窃盗と経済的犯罪では絶対数で第1位をしめているが、逮捕者の人口に対する比率をみれば、ペトログラードは8位であった。（表2, 3, 4を参照）1914年におけるペトログラードの殺人件数は14であり、1915年では15である。武装強盗の件数は全く低く、1915年にたったの3件を記録しているのみであり、非武装強盗の件数は1914年に207件、1915年に60件であった。これらの数字は、人口200万以上の大都市にしては極めて低い犯罪率であったとすることができる⁵⁾。

表 1 : ロシア帝国の都市犯罪 : 1914-1915年

	1914年		1915年	
	件 数	解決件数	件 数	解決件数
窃盗, 300 ルーブル以下	41946	21043	34093	16537
窃盗, 家宅侵入	8521	3537	7678	3124
窃盗, 300 ルーブル以上	4284	2132	5037	2323
横領	2446	2015	1548	1238
詐欺, ゆすり	1889	1521	1569	1221
非武装強盗	1667	1024	734	453
馬泥棒	1228	589	1367	516
列車強盗	955	286	603	199
殺人	504	405	473	371
武装強盗	334	211	275	190
殺人未遂	261	201	251	211
軍隊からの武器窃盗	239	115	225	211
公文書の偽造	189	185	191	169
贋金造り	145	100	101	77
放火	125	73	97	52
郵便局, 銀行強盗	59	54	30	25
教会での窃盗	45	35	40	19
人身売買	37	34	21	21
徴兵忌避	31	30	220	210

出典 : “Городския преступления за 1915 год,” *Вестник Полиции*, №. 39, 1916, стр. 940-41.

表 2 : ロシア帝国の都市における犯罪 : 逮捕者数

	1914年			1915年		
	男	女	合計	男	女	合計
ペトログラード	10341	612	10953	9438	962	10400
オデッサ	8100	1097	9197	6938	1079	8017
エカテリノスラフ	2819	308	3127	1283	161	1299
ロストフ・ナ・ドヌー	2789	131	2920	660	65	725
サマラ	2165	316	2481	1804	309	2113
モスクワ	1494	243	1737	1245	176	1421
ハリコフ	1420	224	1444	1765	167	1932
リガ	1403	32	1435	1289	61	1350
アストラハン	1231	47	1278	1337	77	1414
タシケント	1148	46	1194	852	42	894
サラトフ	969	154	1123	819	20	839
バクー	995	18	1013	888	33	921

出典 : “Городския преступления за 1915 год—продолжение,” *Вестник Полиции*, №. 40, 1916, стр. 958.

表3：1914年における1000人に対する逮捕者数

	人口(1000人)	逮捕者数	比率
オデッサ	499.5	9197	18.4
サラマラ	143.8	2481	17.3
ロストフ・ナ・ドヌー	172.3	2920	17.0
エカテリノスラフ	211.1	3127	14.8
アストラハン	151.5	1278	8.4
サラトフ	235.7	1444	5.9
ハリコフ	2244.7	1444	5.9
ペトログラード	2118.5	10953	5.2
バク	232.2	1013	4.4
リガ	558.0	1435	2.6
モスクワ	1762.7	1737	1.0

出典：“Городския преступления за 1915 год—продолжение,” *Вестник Полиции*, №. 40, 1916, стр. 958; А. Г. Рашин, *Население России За 100 лет*, Москва, 1956, стр. 93.

表4：ペトログラードにおける犯罪, 1914-1915年

	順位	1914年	1915年
窃盗, 300ルーブル以下	1	3710	3657
窃盗, 家宅侵入	1	1125	1050
窃盗, 300ルーブル以上	1	1002	1369
詐欺, ゆすり	1	94	153
横領	1	388	496
馬泥棒	2	68	62
非武装強盗	1	207	60
殺人	4	14	19
武装強盗	24	-	3
殺人未遂	3	-	11

出典：“Городския преступления за 1915 год,” *Вестник Полиции*, №. 39, 1916, стр. 941-942. および “Городския преступления за 1915 год—продолжение,” *Вестник Полиции*, №. 40, 1916, стр. 957-58.

このような安全な都市は、二月革命を境にして危険な犯罪都市へと一転した。二月革命は三つの点で犯罪率の増加をもたらした。第一に、二月革命の過程でペトログラードの刑務所に服役していた大多数の囚人が解放された。ソ連のアルヒーフによれば、2月26日に市内の刑務所には合計7,652人の囚人が服役していることになっている⁶⁾。このうちの何人が政治犯であったかは不明であるが、おそらくこの大部分は刑事犯であったと推察される。第二に、二月革命の過程で蜂起した民衆は大量の武器を手にした。その一部は犯罪者の手にも行き渡ったと考えるべきである。大量の火器の存在は、二月革命以降の犯罪の性格をより暴力化した⁷⁾。第三に、二月革命は旧体制の権力の象徴であった警察を破壊した

が、それにとって代わった民警は、犯罪に対処するにはあまりにも無力であった。

2. 窃盗と強盗

新しく政権についた臨時政府や市当局は、多くの市民と共に二月革命の過程とその直後に続発した犯罪の波が、新政府のもとで秩序が回復するにつれて減少するであろうと期待していた。ところが、犯罪率は減少するどころか逆に増加する一方であった。二月革命の直後に頻発した犯罪は、民警や国会軍事委員の権限を装って強制捜査を行い、貴重な財産を押収するという犯罪であった。ペトログラード地区の民警長（コミサール）に任命されたペシェホーフも、二月革命後の最初の数週間、非合法的に為される強制捜査との戦いに忙殺されたと述べている^{7a)}。このような非合法の捜査、押収はかくも頻繁になされたので、新しく民警総督（グラドナチャーリニク）に任命されたユレーヴィッチは、非合法捜査を堅く禁じる総督命令を出さねばならなかった⁸⁾。しかし市警や軍事委員会の命令書を捏造するのはいとも簡単なことであったし、時にはユレーヴィッチの命令にもかかわらず、民警の制服や腕章だけで恐怖に脅える市民を沈黙させるのに十分であった。三月の下旬に摘発された盗賊の隠れ場所には、正式の市警の証明書や命令の書式が山のように積んであったといわれる⁹⁾。ところが四月以降このような強制捜査の例は突然新聞記事から姿を消してしまう。このことは強盗の数が減少したことを意味するものではなく、むしろ犯罪者が民警を装うという手間をとらなくても、所定の目的を達成することができることを学んだことによる。

事実、四月から五月にかけて窃盗、強盗の件数は著しい上昇をしめした¹⁰⁾。既に小さな窃盗などは新聞記事にはならず、めぼしいもののみしか報道されなかった。しかし窃盗、強盗件数の上昇率は凄まじいものがあったので、『ペトログラード・リストーク』は紙上に「首都の盗み」〔столичные хищники〕という欄を設けるほどであった。この欄には前日に起った主だった窃盗、強盗が紹介され、最後に「その他多くの盗みが報告された」という決り文句が繰り返されていた。『ペトログラード・リストーク』は6月16日に前日24時間以内に40件の窃盗と強盗が報告されたというニュースを伝え、「これは前代未聞の無政府状態である」という不安を表明している¹¹⁾。

しかし、これは単なる始まりに過ぎなかった。七月事件で政情が騒然となり、街頭デモが行われ、政府軍との衝突があると、犯罪者はこの機会を利用して市の中央で商店に押し入り、強盗を働いた¹³⁾。7月27日には、20人ばかりの軍服を纏った一団が軍用車でチェルニーゴフ冷凍会社に乗っ取り、軍事作戦にも等しい迅速さで23万ルーブリに値する商品を取奪するという事件があった¹⁴⁾。8月15日には歴史博物館に泥棒が侵入し、500万ルーブリに値する貴重品が盗まれた¹⁵⁾。8月29日には一日で30件もの窃盗、強盗が報告された¹⁶⁾。

十月革命の直前になると窃盗、強盗の数は幾何級数的に増大した。9月13日にはたったの20件であった窃盗、強盗の報告件数は¹⁷⁾、10月4日には250件に、三日後の10月7日には310件に、更に10月13日、14日の二日間で合計800件にも達した¹⁸⁾。民警の無力化と共に頼りにならない民警に報告されない犯罪も増加したと考えられるから、実際の件数はこれを遥かに上回ると推測できる。たったの四カ月前の新聞の論説が一日で40件にも達する

盗みは前代未聞であると嘆いていた事を考えると、十月革命前夜の件数はその十倍にも達し、飛躍的な増加率であったことが分かる。既に盗みの対象に聖域は残されていなかった。盗みはセンナヤ広場のスペースカヤ教会、ヴォルコフ墓地、貴金属博物館などにおよび、さらに革命人民の中心的組織であったスモーリスィのペトログラード・ソヴェトにおいても、いろいろなものが盗まれる次第であった。ナロードニキの伝説的な革命家であるヴェーラ・フィグネルのアパートにもこそ泥が入り込み、また泥棒が泥棒に盗まれたということも報告されている¹⁹⁾。

3. 武装強盗とアナーキズム

三月から十月の間に新聞に伝えられた武装強盗の件数を数えてみると、ペトログラードは危険な都市と化したことが一目瞭然となる。(表5を参照) 1915年にたった3件しか起こっていなかった武装強盗は、この八カ月間で少なくとも87件にも上っている。いうまでもなく二月革命以降、火器が簡単に手に入るようになったことが、武装強盗の増加を促進した重要な一要因であることに間違いはない。このことは強盗から身を守るために市民自身が火器を手にいれなければならないという反応を必然化し、さらに社会全体の暴力化に輪をかけた。

表5：ペトログラードにおける犯罪：1917年3月から10月まで

	1914年	1915年	3月-4月	5月-6月	7月-8月	9月-10月	合計
殺人件数	14	19	13	21	30	26	90
殺人/1日平均数*	.038	.052	.24	.45	.55	.58	.448
武装強盗件数	0	3	23	26	24	14	87
サモソード件数	-	-	1	12	29	33	75
サモソード件数/1日平均**	-	-	.02	.26	.53	.82	-
新聞未使用日数	-	-	2	15	7	5	29

*殺人1日平均数=(殺人総件数)/{(1ヶ月の日数)-(新聞未使用日数)}

**サモソード件数1日平均=(サモソード総件数)/{(1カ月の日数)-(新聞未使用日数)}

1917年におこった武装強盗で興味深いのは、特に五月と六月に自称「アナーキスト」が、「搾取者を搾取する」ために資産家の邸宅を襲い、財産の収奪を行ったことである。アナーキストによるドゥルノヴォ邸不法占拠と、臨時政府による大掛かりな攻撃は、良く知られているのでここに繰り返すまでもない²⁰⁾。しかしドゥルノヴォ事件は氷山の一角であり、他にも数多くのアナーキスト、あるいは自称「アナーキスト」による武装収奪が行われた。例えば4月28日には、リヒテンベルグ侯邸を様々な武器で身を固めた18人の一隊が襲撃して、財産を収奪した。後に逮捕された「アナーキスト」のうち数人は、前科のある犯罪者であることが判明した。5月7日には、前政府高官の邸宅とルーゲ伯爵邸が、アナーキストの攻撃を受けた。5月18日には軍服に身を纏った三人の自称「アナーキスト」、「共産主義者」が、カリーニン通りにある K. K. グリゴリエフ宅を襲い、伯爵と召使の一人を射殺した。後に逮捕された犯人は全て前科者の犯罪者であることが判明した。なか

犯罪, 警察, サモスード

には10数人のティーンエイジャーが「アナーキスト」と称してレスノイの豪邸に押しかけ、震え上がる家人を前にして、庭先にサモワールを持ち出してピクニックを始めたという事件もあった²¹⁾。このような「アナーキスト」による収奪が、一体どれだけ政治意識に目覚めた純粹の「アナーキスト」による収奪なのか、どこまでアナーキズムが犯罪者によって犯罪を犯す便宜として使われたかは不明である。しかし犯罪者が自己の利益のために政治を利用したことは明らかである。このことは4月23日の『ペトログラーツカヤ・ガゼータ』に載った漫画に象徴的に示されている。こそ泥が盗品を袋に入れて持ちだそうとしているところへ市警がやってくる。市警が声をかける。「おい、お前はこそ泥だろう。」泥棒は答える。「市警同志よ。おめいはいしようもねえ反動野郎じゃねえか。ツァーリ警察も同じ考えを持っていたんだぜ。」²²⁾

4. 放 火

1917年の夏はペトログラードの住民にとって困難な時であった。七月にはネヴァ河が氾濫して、多くの住民が水浸しになった住居から退去しなければならなかった。また夏になると市の清掃部の仕事はすっかり麻痺してゴミが回収されず、道端に山のようにたまって悪臭を放ち始め、住民の衛生に危険な状態をもたらした。市の衛生部による統計は、この夏に腸チフス、赤痢、コレラなどの伝染病が流行している事を示している。因みに性病の蔓延も由々しい問題となっていた。

多くの火災が起こったのも夏の盛りであった。そのうちの幾つかは放火の疑いが濃厚であった。7月21日にはディナモ工場で爆発があり、四日後にはレスピラートル工場が全焼した。7月30日には原因不明の火災がドネツコ・ユーリエフスキー工場でおこり、その一週間後には第26発電所が全焼した。8月16日にはウェスチングハウスの工場の大部分が火災のため破壊され、その一週間後にはプチーロフ工場にも火災が発生した²³⁾。1917年の最大の火事は8月11日にオフタで起こった。ネヴァ河右岸のオフタにある工場から出た火事は、直ちに隣接する工場に燃えうつり、十時間も燃え続けた後、四工場を焼き尽くした。火の勢いは対岸のはしけにまで延焼するほどの強さであった。少なくとも20人の焼死者がでたが、火事の発生した直後から、避難した人々のアパートに略奪者が殺到し、50人が逮捕された²⁴⁾。

このように工場での火災が頻発したことは、工場内の管理が著しく低下したことと結びついているに違いないが、他方では労働紛争の激化とも関係があるかも知れない。七月事件以来労働者の要求に対する資本家側の攻勢は激しくなり、これにたいして労働者も既得権を守らなければならないという危機感から、戦闘性を鮮明にしていた。一連の火災は急進化した一部の労働者の跳上りかも知れないし、また労働運動に敵意を抱いていた大衆新聞が、火災事件にかこつけて急進化する労働者の運動を誹謗するために利用したものかもしれない。ともあれこの夏の一連の火災事件は、激化する労使の対立と無関係ではなかった²⁵⁾。

5. 殺 人

二月革命後のペトログラードにおける犯罪で最も顕著な特徴は、殺人事件の急激な上昇である。表5には三月から十月にいたるまで新聞に報道された殺人の二か月毎の件数と、その合計が示されている。この八か月の間に少なくとも90件の殺人事件が報道されている。これは1914年の15件、1915年の19件と比較すれば飛躍的な増加である。もしこれに二月革命以前と十月革命以後の件数をも付け加えれば、更に大きな数字になるであろう。しかもこの数字にはサモソードによる殺人は含まれていない。またこの数字は筆者の利用できた新聞によるものであり、3月5日から10月20日までのあいだ一つの新聞も利用できなかった29日分が除外されている。しかし、このように実際より少ないと思われる数字を基にして一日の平均殺人数を計算すると、1914年に0.038、1915年に0.053であったが、1917年には0.448と上昇している。言い替えれば1914年にはひと月に約1件、1915年には20日に1件であった殺人は、1917年になると2日から3日に1件という上昇を示している。更に重要なことは、ふた月毎の1日平均殺人件数が、3月―4月に0.24、5月―6月に0.45、7月―8月に0.55、9月―10月に0.58と著しい増加の現象を示していることである²⁶⁾。

このような殺人事件の増大とともに、大衆新聞の報道の仕方にも変化が起こっていることを見落してはならない。ここでは典型的な報道の仕方として二つの事件をあげてみることにする。

第一の事件はシュロスベルグ事件である。3月10日カザン通りで弁護士シュロスベルグが帰宅中、自宅の付近で丁度売春宿から出てきた三人の兵士に襲われた。シュロスベルグが財布、腕時計など身につけていたもの全てを与えたにも拘らず、盗賊はシュロスベルグにナイフを突き刺し、ぐったりと倒れた犠牲者をなおも数回にわたり突き刺して逃げ去ったという事件である。民警が到着したときにはシュロスベルグの息は途絶えていた²⁷⁾。

第二の事件は最もセンセーショナルなクレロ殺人事件であった。事件はペトログラード地区の高級住宅地であるカメノオストロフスキー通りにあったマーガレット・セザフ＝クレロのアパートで起こった。4月16日、ナイトクラブの歌手であったクロレは、二人の将校を自宅に招き、ぜいたくな夜食とワインでもてなしたが、深夜の来客は突如強盗と化し、サーベルでクロレと彼女の友人であったマリヤ・ポポーヴァを滅多切りにした。強盗は騒ぎを聞いて駆けつけた女中をもその場で斬り付け、アパートからねこそぎに貴重品を奪いとって逃走した。これ自体センセーショナルな殺人強盗事件であったが、数日後に事件はさらに意外な展開を遂げた。ポポーヴァと女中は即死したが、奇跡的にもクロレは一命をとりとめ、数日後に意識が回復してから、犯人の一人は顔馴染のフォン・シュリッペン男爵であると告白したのである。シュリッペンとは、1916年11月に軍当局の強制調達を装い、資産家のジートフスキー邸の大規模な収奪を遂行したことで悪名の高い男であった。二月革命のどさくさに監獄から脱走し、その後堂々とクロレの入りびたっていた頹廢的な社交界に顔をだしていた²⁸⁾。

シュロスベルグ事件は、時と場所を問わずだれにでも起りうる殺人であった。その不条理さは読者に不安感を与えたに違ひなく、新聞もそのおぞましさを強調する書き方をしている。これに反してクレロ事件の方は、大衆新聞がお得意にしているような猟奇的な書き

方をしているのが目立つ。大衆とは程遠い特権階級の頹廢的生活の暴露という点で、おそらくラスプーチンの暴露物が流行したと共通性があるのかもしれない。ともあれ、大衆新聞が大衆の俗悪な猟奇的興味を満足させるような殺人事件の残忍なデテールを書き記すことも、引き続いて行われた。

例えば5月18日『ペトログラード・リストーク』は、エカテリノゴフキ川で発見された両手を後ろに縛られ頭に深い傷のある女性の死体について報道している²⁹。5月24日には、明らかに強姦の犠牲者と見られる若い中国人の女の、両眼をえぐりとられ、咽喉をかきぎられ、乳房や他の部分に無数のナイフの刺し傷があった死体の発見を伝えている³⁰。

『ペトログラード・リストーク』は、八月のコロニーロフ事件の報道でもちきりであった紙面に、ペトログラードの様々な川岸で包装紙に包まれた肢体、腕、脚などが別々に発見されたバラバラ事件を報じることも忘れてはいなかった³¹。『コペイカ』は八月の下旬に、レスノイの変質者に殺害された犠牲者の死体が次から次へと発掘されたことを挿絵いりて報じている³²。(当時の新聞には写真が印刷されることはなく、挿絵も極めて稀であった。)

しかしセンセーショナルリズムのなかにも、野放しに広がりつつあり、無差別に行われる殺人に不安と憤りをもって報道するという傾向も明らかであった。若い女性がアレクサンドル・ネフスキー僧院の中庭で強姦され殺害された。長い歴史を誇るこの聖なる寺院のなかでこのような殺人事件が起こったのは前代未聞であった。この報道には、猟奇的というよりむしろ歯止めを失ったかのように広がる残虐な犯罪に対する不安感が表明されている。十月のレスノイで起こった一家虐殺事件になると、新聞の報道には不安感よりも憤りが表面にだされてくる。かつては閑静な住宅地区として知られたレスノイは、二月革命以後急速に危険な犯罪地帯へと化していった。5月2日には二人の脱走兵が中流家庭に押し入り、女中を絞め殺し、留守番をしていた13歳の少年を殴り倒し意識不明にした後、盗みを働いたという事件があった³³。10月1日には残酷な一家虐殺事件が発生した。たまたまレスノイ地区の民警本部の所在した建物のなかのアパートに何者かが侵入し、両親と三人の小さな子供を虐殺したという事件であった。この事件の直後連日、憤激した住民が民警本部を取り囲み民警の怠慢さに抗議する集会を開き、あるときは集会の空気が険悪になり暴動寸前という光景もあった³⁴。

ロシア革命時の殺人の特色として二つのことを付け加える必要がある。第一は、七月事件以降、政治的意見の違いが殺人にまで発展するという事件が頻繁に起こっていることである。これには政治的意見の相違が意見の交換や相互の譲歩によって解決するという習慣とメカニズムが次第に失われ、その解決の唯一の手段が暴力の行使になりつつあるという社会の暴力化のもう一つの特色が示されている³⁵。

第二は、犯罪における中国人の役割である。七月と八月には少なくとも5人の中国人が殺害されている。レスノイの一家虐殺事件の容疑者として逮捕されたのも中国人であった。第一次大戦中ロシアの資本家は、労働力不足を解消するため中国から廉価な中国人労働者を移入した³⁶。そのうちの約一万人がペトログラードに集中したといわれる。これらの中国人は主として未熟練労働者として雇用されていた。殆ど奴隷労働に近い賃金で働か

され、言葉も自由にならず、労働運動のなかに組織されることもなく、二月革命の後の経済的不況のなかで最初に街頭にほうりだされたのは中国人労働者であった。したがって失業はこれら中国人労働者にとって深刻な問題となった。中国人はノーヴァヤ・デレューニャ、ペスキ、ロジデェストヴェンスキー地区などの一角に独自の中国人街を形成し、住宅事情の悪いロシア人の目にさえ信じがたいと思われるほどの劣悪な木賃宿に、信じがたい人口密度で住んでいた。賭博と阿片の常用は中国人街の特有な悪徳として特筆されている。時折新聞には、このような木賃宿に踏み込んだ民警が、黄色い阿片の煙に包まれたなかで無数の中国人が意識もうろうとして横たわっている様を見たことを伝えている。恐らく中国人のなかには自己保存の必要性から、あるいは阿片の購入と賭博の組織の必要性から、様々なギャングが構成されたものと思われる。夏に起こった中国人の殺人事件は、恐らくこれらギャング間の争いに根ざしているのかも知れない³⁷⁾。秋になると犯罪が中国人の間のみにとどまらず、ロシア人地区も広がって行く傾向があった。これはロシア人のある伝統的な人種的偏見を呼び起こし、ノーヴァヤ・デレューニャでは憤激した住民がペトログラードからの中国人の排斥を要求するに至った³⁸⁾。

二月革命を機として犯罪率は堰を切ったように激増した。かつて安全であったペトログラードは、急速に危険極まりない都市へと転化した。革命の深化により社会的秩序が崩壊するにつれ犯罪率は上昇し、またそのことが社会秩序の崩壊を促進した。十月革命前夜のペトログラードはホッブスの定義する「自然状態」に遠からぬ社会になりつつあったといってもおそらく過言ではないであろう。二月革命の際に逮捕され、クレストィ刑務所に服役していた前ペトログラード秘密警察（オフラナ）長官の K. H. グロバチョフは、八月の末に釈放されたが、監獄にいる間に変わり果てたペトログラードの状況を次のように描写している。

「九月と十月になると本質的には無政府状態がペトログラードに君臨した。犯罪者の数は想像もできないくらい増大した。強盗や殺人が毎日のように、もはや夜の闇に紛れてではなく、白昼堂々と犯された。住民は自己の生命を守ることに専念しなければならなかった。既存の権力からは何の助けも得られないことを知って、住民は自ら建物の自警組織を作り、強盗の侵入に備えて警備手段を講じた。夜になると常にどの建物の前にも武装した守衛が置かれた。しかしこのような手段も、強盗を減らすことには何の役にも立たなかった。」³⁹⁾

II. 犯罪の要因

1. 犯罪者と脱走兵の存在

犯罪率の増大を直接促進した重要な要因として、犯罪者と脱走兵の存在があげられる。臨時政府は犯罪者をも旧政府の抑圧の犠牲者であると信じて、犯罪者を利する一連の法令を発令した。3月12日には死刑が廃止され、3月17日には旧政府の裁判所で受けた刑期の大巾な縮小と大赦を与える法令を発令した⁴⁰⁾。この法律によれば、死刑の判決を受けた死刑囚は15年を超えない流刑と強制労働、流刑による強制労働の刑を受けた囚人はその刑期が半分に削減され、他の流刑者は3年に減刑、その他全ての囚人には大赦が与えられた。

二月革命中に脱走した犯罪者は、5月1日までに自発的に出頭することが命ぜられた。自発的に出頭した犯罪者の刑は半分に減刑されることになっていた⁴¹⁾。しかし自由の身になり混乱に紛れて犯罪を犯す千載一遇の機会に恵まれている時に、このこと出頭するようなおめでたい犯罪者は少なかった。臨時政府の期待に反して、革命は一夜にしてしたたかな犯罪者を模範的な市民に転ずることはなかったのである。人間の善意を信じようとしたこのような法令が効果の無いことはもとより、危険であることが判明したにも拘らず、司法大臣ケレンスキーはさらに前線に志願する犯罪者を釈放する法令をも発令した。クレストィ刑務所で刑期を共にしたグロバチョフは、犯罪者がこの法令を次のように受け取ったと記している。「おれたちが戦争に志願するのをなんたるまぬけだと思いにちげえねえな。だがな、そうは問屋がおろさねえ。おれたちは着るものを着せて貰い、食うものを食わせてもらい、そして汽車が最初に止まった瞬間、あばよとずらかるまでのことよ」⁴²⁾レーニンの言葉を言い替えれば、まさにロシアは犯罪者にとっては世界で最も自由な国と化したのであり、勿論この自由は犯罪者によって最大限に利用された。『ペトログラード・リストーク』は次のように述べている。

「もしペトログラード全体に盗みが起こり、収奪されているとしても、それはわれわれを驚かすものではない。なぜなら二万にも及ぶ犯罪者がいろいろな監獄から釈放されているからである。完全な市民権を享受した強盗が、ペトログラードの市内を堂々と闊歩しているのである。刑事警察の警部が町なかで顔見知りの犯罪者にあっても、何をすることもできない。犯罪者のなかには旧政府の裁判所で諸権利を喪失したものが多いが、いまでは彼らはそんな判決はすっかり無視している。」⁴³⁾

もう一つの犯罪的要素として脱走兵の存在が挙げられる。二月革命の際兵營を抜け出し蜂起した兵士の一部は、二度と兵營に戻らなかった。さらになにかうまい話しはないかと上京してくる脱走兵がこれに加わった。歴史家の中では、戦線から逃げ出した脱走兵は、農村での土地の分割にありつくために脱走したという説が有力であるが、この一部は郷里に戻らず首都で途中下車したことを忘れてはならない。食料不足が急速に進行したペトログラードで、食料配給券にありつくには正当な組織に属していることが必要条件であったから、定職もない脱走兵にとって犯罪は重要な生活の手段であった。しかも脱走兵は、戦争で荒廃したすさんだ残忍な精神と行動を首都の生活にもちこんだ。七月にこのような脱走兵は、ペトログラードに五万から六万も存在していたと伝えられている⁴⁴⁾。この数字が正しいとすれば、じつにペトログラードの全人口の約3%から4%が、犯罪者と脱走兵で占められていたというおそろべきことになる。

徐々に犯罪者と脱走兵は、民警でさえも足を踏み込むことが危険な独自のコロニーを形成し始めた。そのようなコロニーはザバルカンスキー大通りの娯楽街「オリンピア」の附近、ナルヴァ地区のヴォルコヴォ村、ヴァシリエフスキー島のガレルナヤ・ガヴァーニ、ガーヴァンスコエ原、ゴロダイ、更にリーゴフキ、ペスキ、ポリューストロヴォなどに存在した。三月から四月にかけて民警は度々犯罪者や脱走兵の巣窟を摘発して疑わしい人物を逮捕したが、以下に述べるような新しい司法制度の不備のため、上京してくる犯罪者、脱走兵が加わり、日々に増大する犯罪人口を減らす手段としては焼け石に水であった⁴⁵⁾。

夏になると犯罪者や脱走兵はもはやおとなしく民警のいいなりになってはいなかった。民警の摘発にたいして武力で立ち向かうという例が頻繁に起こった。民警の摘発も軍事行動まがいの大掛かりなものが多くなった。七月の末ヴォルコヴォの強盗集団にたいして行われた摘発もその一例である。最初の民警による摘発は、強盗の巣窟からの武装抵抗を呼び起こした。民警と犯罪者との撃ちあいは半時間あまり続いたが、一人の民警が重傷を負った。八月になると、今度はイズマイロフスキー連隊と第四ドン・コサック連隊の数小隊の援助を受けた民警の小隊は、注意深くあらかじめヴォルコヴォを取り囲み、150人を逮捕した。このような犯罪者からの抵抗は例外ではなかった⁴⁶⁾。七月と八月に行われた24の民警の摘発のうち八つまでに武装抵抗が起きている⁴⁷⁾。時には民警による犯罪者の逮捕が、犯罪者のコロニーの住民の蜂起を招くこともあった。七月に起こった「オリンピア」での暴動はその典型的な例である。この歓楽街で民警が疑わしい数人の人物を逮捕したことから、多数の脱走兵、犯罪者、愚連隊、その他の群衆が抗議集会を開き、民警本部に押しかけた。二月革命のときのデモを思いださせるように、群衆は「ファラオー！ 抑圧者！」と叫びながら民警本部に殺到し、逃げ遅れた数人の民警を捕まえ殴りつけた。一人の民警は三回の窓から突き落され、下に殺到した群衆により袋叩きにされた⁴⁸⁾。

2. 新しい司法制度

レナード・シャピロによれば、第一次臨時政府の指導者は「人間の完全性に対するナイーブな信頼と、暴力と強要に対する嫌悪」に導かれていたとする⁴⁹⁾。これは特に新しい刑事司法制度に直接責任のあった内務大臣のГ. E. リヴォフと司法大臣のケレンスキーにとってあてはまることである。先に述べた死刑の廃止や刑事犯に対する大赦の法令は、このような基本的な考え方に基づいたものであった。さらに4月17日に発令された「民警に関する暫定的規則」は、刑事犯の基本的な人権の擁護を重視した規則であった。例えばその28条は、民警が具体的な犯罪を犯したという告発なしに容疑者を24時間以上拘束することはできないと定めている。したがって犯罪者のコロニーにおいて度々行われた一斉検挙でせっかく逮捕した疑わしき人物の多くは、翌日には町に逆戻りすることが多かった。

また、新しく設定された臨時裁判所〔временный суд〕も、新政府のもとでの刑事司法制度に信頼感を抱かせる性格のものではなかった。二月革命の過程で旧政府のもとでのあらゆる司法制度が崩壊した。この法的アナーキーという危険な真空を急遽埋めなければならぬという必要性から、ケレンスキーによって「蜂起に参加した人民と有産階級との誤解を最小限にする」という目的で暫定的に作られたこの臨時裁判所は、治安判事を裁判長とし、労働者からの代表者一人と兵士からの代表者一人との三人からなる裁判であった。暫定的な性格であったにも拘らず、これはペトログラードにおいて事実上唯一の裁判機関として機能した⁵¹⁾。この裁判の一つの特徴は判決が恣意的であったことである。法務省の役人として内部からこの裁判に関与したB. マヌーシキンは、同じ種類の窃盗にたいして、勧告の判決から最大の罰金である一万ルーブリまでにいたる様々な判決が課せられたと述べている。一般に臨時裁判は窃盗にたいして極めて寛大であった。これにたいしてゴミの処理を怠った家主が一万ルーブリの罰金を課せられることもあった⁵²⁾。異なる階級

の間の宥和を目的としたこの臨時裁判所は、階級対立が一層険悪化しつつある時に当初の目的を果たすどころか、むしろ階級対立を一層促進する役割を果たしたとおもわれる。しかも平凡な不倫訴訟から残虐な強盗事件までを裁いた臨時裁判所は、日に日に増加する犯罪の数に効果的に対処しえたとは到底考えられない⁵³⁾。

ツァーリスト体制の刑事司法制度の崩壊は意外なところに飛び火した。法的には警察組織のなかに組み入れられてはいなかったが、どの建物にも存在し、警察と密接な関係を保ちつつ、建物に出入りする人物に警戒の目を光らせていたドゥヴォルニク（守衛）は、旧体制の下では犯罪の防止に役立った。二月革命の後ツァーリ警察の手先であったという批判に強く反発して、ドゥヴォルニクは五月に自己の労働組合を結成し、今後建物の警備は行わないと宣言した⁵⁴⁾。5月9日民警総督ユレーヴィッチはこれにたいして、ドゥヴォルニクの夜間の強制的警備を命令し、違反者は罰すると威嚇した。ドゥヴォルニクは、自己の組織と何の相談もなく一方的に出されたこのような威嚇は無視すると、さらに態度を硬化した。ドゥヴォルニクのストライキに直面して、ユレーヴィッチは強制義務の命令を撤回せざるをえなくなった。そのかわりドゥヴォルニクは夜間警備を任意的に行うこともありうることを譲歩した⁵⁵⁾。この後ペトログラードの建物は、警備の不在という裸同然の状態に置かれたのである。

泥棒や強盗が逮捕され、裁判にかけられ、監獄に送られても、そのような犯罪者が安全に社会から隔離されたという保証はなかった。二月革命は刑務所の警備に関しても大きな欠陥を生じさせたのである。臨時政府は、監獄の所長、獄吏はツァーリスト政府の手先であるとして、刑務所の改革に乗り出した。その第一歩は、旧政府下の所長、獄吏のクビをきり、新しい獄吏を採用することから始まった⁵⁶⁾。しかしこのような即席の獄吏は、警備については訓練も受けていない全くの素人が多かった。刑務所での警備力は当然のことながら著しく低下せざるをえなかった。ペトログラードの刑務所の中でも最も厳しい警備体制を採っていることで有名なクレストィでさえ、グロバチョフは次のような描写をしている。獄吏は屢々昼寝をむさぼり、お茶を飲んだり、食事のために銃を囚人の手に届くような場所に置き去りにして長時間いなくなってしまうこともあった。囚人が刑務所の中庭で歩行する時間には、屢々全く獄吏の監視がないときがあった。多くの囚人が脱走したが、グロバチョフ自身は前秘密警察長官という身分を考え、外よりも監獄の中の方が安全であると判断して留まっていた⁵⁷⁾。

七月事件に関連して多くの政治犯が監獄にぶちこまれたが、これらの政治犯はコロネーロフ事件の後釈放されるか、そうでなければ監獄から脱走した。8月30日にはクレストィから208人の囚人が、同じ日に150人の囚人がペテルホーフ市警本部から逃走した⁵⁸⁾。この全てが政治犯であるということとはできない。刑事犯もこのときを利用して脱走したものと思われる。例えば、クレストィから脱出した208人のうち政治犯はたった30人のみであった。

人間の善意を信じ理想主義に燃えて出発した新しい刑事司法制度は、結局のところ機能しなかった。逆にそれは犯罪者に利用され、犯罪率の上昇に貢献することになった。

3. 民警の無力化

犯罪率の上昇を促進したもう一つの重要な要因は、ツァーリ警察に代わって創設された民警が犯罪を防止するにはあまりにも無力であったことである。これにはいろいろの原因があるが、まず第一に民警の組織が市＝民警〔городская милиция〕と労働者民警〔рабочая милиция〕との二重権力のもとに分裂していたことが挙げられる⁵⁹⁾。市＝民警はペトログラードの市ドゥーマにより組織され、階級的相違を超越して全ての市民より構成され、全ての市民のために奉仕するという民主的原則のもとに成り立っていた。その機能は公共の秩序を保持し、個人の生命と財産の安全を保証することにあつた。これにたいし労働者民警は労働者のみから構成され、労働者の利益に奉仕する階級的組織であった。しかもその目的は、労働者によってかちとられた革命の成果に対し、予期される反革命的攻撃を武力で排除するという政治的なものであつた⁶⁰⁾。したがってもし労働者民警が犯罪の防止という公共の秩序にも役割を果たしたならば、それは必要に迫られて止むをえず果たさなければならなかつた機能であり、始めから予期された機能ではなかつた。労働者民警は形式的には市＝民警の権力を認めたが、実質的には独立した組織を保持した。一般的にいえば、市＝民警は市の中心地でその権力を確立したが、労働者民警は市の中心から離れた工場地帯でその機能を発揮した。しかし市＝民警と労働者民警との関係はもっと複雑で、民警と赤衛軍に関する著作の著書であるウェイドは次のように説明している。

「詳しく見ていくと、このようなきれいな図式はあまり現実にあてはまらないことが分かる。工場に基礎を持った労働者民警のある部分は、いろいろな程度の独立性を保ちながら市＝民警本部に従属しその命令にしたがったが、他の部分は如何なる形での従属をも拒否した。市＝民警内部においても、主として労働者から構成されていたが完全に市＝民警組織のなかで機能していた組織もあつた。多くの地区はそれぞれ労働者民警と市＝民警との間で勢力が分配される小地区に分かれていた。さらに幾つかの小地区においては、ある建物、通り、地域は労働者民警が、その他は市＝民警がパトロールしていたというところもあつた。そのような小地区では、労働者民警と市＝民警との並行する組織が存在し、暫定的な縄張りの分配が行われた。最後にこのような権力の分配は、一般に二月革命のときに確立した境界線に基いていた、ある程度の変更と再組織が行われ、また市当局によって労働者民警を閉鎖させたり、あるいはこれより厳しい管理下に置こうとする努力が常に払われた。」⁶¹⁾

第二に、労働者民警と市＝民警双方とも中央集権性を排し、地方分権性の原則のもとに機能していたことである⁶²⁾。したがって双方とも地区組織の独立性とその最高責任者の選挙制を主張した。臨時政府や市政府は中央集権の原則のもとに民警を再組織しようとしたが、この試みは両組織からの強い反対にあつて成功しなかつた⁶³⁾。

第三に、特に市＝民警についていえることであるが、民警の警官の質が低かつたことである。二月革命直後の設立当時には市＝民警の警官は学生や他の中間層からのボランティアから成り立っていた。ボーイスカウトまでが動員されたことも記されている⁶⁴⁾。のちにはコミサールと呼ばれた地区＝民警長による民警警官の採用はもうすこし注意深くなされたが、それでも一般に民警警官の基礎的訓練の不足という欠陥は免れなかつた。労働者民

警の水準も、ひと月かふた月のうちにめまぐるしく交代するため決して高いとはいえなかった。しかし犯罪の激増と共に民警の無力が露呈され、市当局と臨時政府は旧ツァーリ警察の刑事を再採用することによって刑事警察を創設せざるをえなかった。問題はツァーリ警察の刑事は殆ど全て逮捕されており、監獄に服役中であったことである。民警総督は3月9日にこのような刑事の釈放を命じ刑事警察を創設したが、その部長に任命されたキルピーチニコフは数日の間監獄に閉じ込められたままであった。刑事警察は臨時政府の法務省のもとに直轄され、部長と二名の副部長のもとに、10名の刑事、200名の刑事補から成り立っていた。全員が素人である民警と比べれば、刑事警察はたちの悪い犯罪者に対処するのに効果的に機能したが、100ルーブリから200ルーブリという低賃金で働かされ、旧政府の手先であったという焼印を押されていることもあり、十分な活動は期待しえなかった。しかもペトログラード・ソヴェト、市ドゥーマ、軍当局からの代表者から成る監察委員会の監視下におかれていた⁶⁵⁾。

第四の理由は民警と民警警官に対する財政的援助の不足である。市＝民警は市政府によって賄われていたが、市政府の財源は極度に悪化したため、民警の財政的基礎は危ういものになっていった。労働者民警は工場の所有者側からの給料という形で賄われていたが、労使間の関係が悪化するにつれて使用者側の支払拒否の例が続発した。労働者民警と赤衛軍は実力行使により資金と武器を調達したが、資金の不足は市＝民警に深刻な結果をもたらした。このため驚くべきことには、市＝民警警官の全てに武器が行き渡らなかった。このことは犯罪者や愚連隊から襲われたときに自己防衛も困難であったことを意味し、更に市＝民警の士気の低下を促進した。十月には民警が若い愚連隊の一味に囲まれ、銃を顔につき突けられて脅され、愚連隊が哄笑するなかを四つんばいで這い廻り犬のように吠えることを強要された事件があった⁶⁶⁾。資金の不足は更に制服や長靴の不足となり、市＝民警警官の不満を益々高める要因となった。しかし最も重要な結果は賃金の低さであった。

このような不満が高まり、十月には市＝民警の警官は自己の労働組合を結成するに至った。皮肉なことにこの労働組合はペトログラード・ソヴェトへの加入を求めた。民警労働組合は市政府にたいし、賃金の値上げ、武器、制服、長靴の支給を要求した。賃金値上げの要求は、普段は保守的であった刑事警察の支持をも受けた。刑事警察は法務省にたいして陳情書を送り、七月から全く賃金を受け取っていないと訴えた。犯罪者の一部がぜいたくな住居を構え、高価なホテルを根城にして、運転手付きの自動車ですり回っているとき、賃金が支払われるかどうか分からないまま自己の生命の危険を賭けてまで強盗犯の追跡に身を削ることが馬鹿らしいと思うのも当然のことであった。市政府に対する要求にたいして満足する回答を得られなかった市＝民警警官は、ついに10月11日までに満足を得られる回答がない場合にはストライキに突入すると決議した。地区の市＝民警警官は業を煮やして地区ソヴェトや工場委員会に訴えた⁶⁷⁾。十月革命が起こったとき、市政府はストライキを回避するために市＝民警警官の労働組合と交渉中であり、他方で民警を見捨て新しい警察制度の根本的な改善策を建てようとしているところであった⁶⁸⁾。

犯罪率の上昇に脅かされた市民は、何の術もなく手をこまねいているかにみえる民警を批判し始めた。すでに四月－五月に新聞は民警のなかに犯罪者が入りこんでいる例や、公

共の場で泥酔という醜態をさらけだす民警の例をあげて民警を批判した。このような批判は市ドゥーマの討論にも反映された⁶⁹⁾。しかし秋になると新聞はもはや個々の民警の逸脱というより、民警制度そのものを批判するようになった⁷⁰⁾。この論調の変化は、10月20日の『ペトログラード・リストーク』に載った漫画に端的に示されている。中年の夫婦が人気の無い通りを歩いていると、後ろから強盗に襲われそうになる。前には民警がパトロールしている。夫婦は絶望的につぶやく。「ああ、これで一卷の終わりだ。後ろに強盗、前に民警だ！」⁷¹⁾

III. 犯罪に対する反応

1. 首都逃亡

住民がいかに犯罪に対応したのかについてまず挙げられるのは、ペトログラードから逃げ出してしまうことであった。七月にはいつもの避暑客よりもかなり多い6,000人がペトログラードからクリミヤに到着したと伝えられている。ある人々にとっては亡命生活は既にこのときから始まったといえる。邸宅やアパートを売りにだしたり、借家人を求めたりする新聞広告が多くなったのもこの夏であった。しかし空になった家屋やアパートが、下層階級のために貸しだされることはめったになかった。家屋やアパートの所有者は、臨時政府や市政府によって発令された厳しい家賃管理法のもとでは採算が採れないと判断して、むしろ家を閉鎖して首都を去ることを望んだのである。従って多くの空家が存在していたにも拘らず、ペトログラードには深刻な住宅不足が発生するという異常な事態が起こった。このことは既に進行していた階級対立に一層拍車を駆けると同時に、主人が留守中、全く無力の下男や女中に守られているぜいたくな邸宅やアパートは、犯罪者の格好な餌食となった。

しかし首都を逃げ出したのは単に富裕階級のみではなかった。秋までに約12万人がペトログラードを去ったといわれている。勿論これには食料危機、失業問題、住宅問題、疫病の発生などいろいろの要因があるが、犯罪もその一端をになっていたことは確実であると思われる^{71a)}。

2. 住宅自治委員会〔домовые комитеты〕

増大する犯罪に脅かされ、建物の安全を保っていたドゥヴォルニクにも見放され、住民は自己の生命と財産を守るために自分たちで組織を作らなければならなかった。すでに四月には住宅地の個々の建物で住宅自治委員会が結成されていることが伝えられている。その一部は建物への門を日夜閉鎖し、そこに住む住民に通行証を発行し、住民の間に警備当番をおくことを決定した。なかには、一歩進んで私的な建物民警を結成するものもあった⁷²⁾。秋になると既に民警に頼ることができないことが明確になり、多くの住宅自治委員会は近くの兵営から兵士を傭い、傭兵による警備隊を形成し始めた。市＝民警による武器の支給の要求には乗り気でなかった市政府も、このような私的な住宅自治委員会の傭兵に対してはより寛大に武器を引き渡した⁷³⁾。暴力組織の公的な制度化が崩れ去り、公的な暴力と私的な暴力の差がなくなりつつあることは、社会の暴力化のもう一つの重要な兆候で

あった。

3. サモスード

ロシア革命下のペトログラードで最も恐ろしいことといえば、サモスードに勝るものはないであろう。サモスードというのは警察力が無力化した状況で、犯罪に脅かされた市民が、スリや窃盗犯の捕らえられたときに犯人を取り囲み、その場でぶち殺してしまう凄まじい私刑のことである⁷⁴⁾。5月13日の『ペトログラード・リストーク』は、「泥棒に対する小さなサモスードの例は以前にも認められたが、昨日から急激に新しい段階に達したと思われる」と述べ、前日に起こった三つのサモスードの例を挙げている⁷⁵⁾。その後突然サモスードが新聞紙上を賑わすことになった。白昼、ペトログラードの目抜き通りであるネフスキー大通りとサドーヴァヤ通りの交差点で、二人のスリが群衆に囲まれて殴り殺された。商品をためこんでいると疑われた商店の店員が、憤激して店に押しいった群衆に袋叩きにされた。ある倉庫で盗みを働いているところを見つかった現行犯が、集まった群衆に叩き殺された。これは全て一日のうちに起こったことである。群衆が集まるところではだれかが「ぶん殴れ。奴がやったことを知っている」と叫ぶだけで十分であった。群衆は例外なしに指をさされた容疑者におどりかかった。暴力の行使に疑問をはさむ穏健な声は無視され、しばしばこのような意見を述べる者自身サモスードの対象になった。まるで鶏の群れが最初にくちばしでつつかれて血を出す鶏におどりかかるように、犠牲者の血は群衆を興奮させて行動へと駆り立てるかのようであった⁷⁶⁾。

サモスードの例はかくも頻繁に起こったので、『コペイカ』は「今日のサモスード」という欄を設けたほどであった。

五月と六月の二か月の間に合計12のサモスードが新聞に伝えられたが、この数字は七月と八月には23、九月と十月には33へと増大した。これを一日平均になおすと、三月-四月に0.02であったのが、五月-六月に0.26、七月-八月に0.53、更に九月-十月に0.82と急激な上昇ぶりをしめしている。(表5を参照)

典型的な例はスモレンスカヤ通りとルベンスカヤ通りの角で起こった。泥棒が捕えら群衆が集まった。群衆は民警に引き渡すことを拒否して、その場で人民裁判にかけられることを決定した。「人民裁判が最も公正で、最も迅速な裁判である」「泥棒は民警に引き渡せば逃げてしまうに決まっている」と口々に叫ぶ声が聞こえた。審議は短時間でおわり、満場一致で死刑の判決が下された。群衆は直ちに靴や、棒切れや、石を手にして泥棒に殴りかかった。民警が駆けつけて民衆を制止しようとする、群衆は民警に投石した。遂に民警が群衆を引き離れた時には、血まみれになった泥棒は意識不明であった。哀れな被害者が病院に担ぎ込まれたときには既に手遅れであった⁷⁷⁾。

七月には数人の男が、走っている自動車からアレクサンドル庭園付近にたむろしていた兵士をめがけて発砲した。二人の兵士が負傷し、一人の傍観者が射殺された。発砲者は憤激した兵士たちに捕まり、文字通り体から手足をもぎとられるという悲惨な最期を遂げた。あとで駆けつけた民警は、道路に散らばった身体の一つ一つをひろい集めなければならなかった⁷⁸⁾。

五月と六月にはサモスードは主として犯罪者にたいして行われたが、夏に入ると商人に対するサモスードの例が多く伝えられている。しかもこれらのサモスードには反ユダヤ人的な色彩が濃厚であった。例えばセンナヤ広場で荷車を引いていたシャーリコフというユダヤ人皮革商人が、荷車のなかになにか怪しいものを隠しているのではないかと疑う群衆に囲まれた。民警の小隊が現れ、荷車のなかを調べたがなにも異常は認められず、人々に静かに家に帰るよう勧告した。千人ぐらいまでにふくれあがった群衆は、勧告を無視してシャーリコフをサモスードにかけようと決定した。武器を持っていない民警はこれにたいし為す術も無かった。群衆からはその場で殺してしまえとか、運河にほうりこんで溺死させてしまえという意見が出されたが、シャーリコフをペトログラード・ソヴェトに引き渡そうとする「穏健な」意見が主流を占めた。皮革商人は荷車に縛り付けられ、町中を曳きづり回され、その間絶え間なく群衆から殴打された。ついにスモーリヌィに着いて釈放された時には、シャーリコフは既に錯乱状態にあった⁷⁹⁾。

八月の末から九月にかけて市内の数箇所、特にコロメンスキー地区とロジデストヴェンスキー地区で食料暴動が起こり、その際ユダヤ人商人に対するボグロムが発生した⁸⁰⁾。

秋になり十月革命がさし迫ってくる頃になると、サモスードはさらにその醜い様相を露わにしてきた。9月14日には一人の精神病患者が病院を抜け出し、自分は看護婦に殴られたと大声で喚き散らして町なかを歩いていた。これを見た群衆は精神病院に押しかけて院長をサモスードにかけた。一週間後にはセンナヤ広場で一つの林檎を盗んだ男が群衆に捕まり叩き殺された⁸¹⁾。10月15日にはサドーヴァヤ通りとアブラクシン通りの角にあった店に、軍服を着た男と、奇麗な洋服に身を纏った若い女が買い物に来たが、万引きをしたところを捕まえられた。たちまち群衆が群がり、市電がじゅずつなぎになって止まってしまう有様であった。民警の一隊が到着したが群衆を宥めることができず、丁度近くの国営銀行に配置されていた兵士の応援を求めた。兵士は群衆を店から隔離することに成功したが、その際群衆から「おまえらは泥棒を匿う民警みたいだ」という罵声が投げ掛けられた。しかし数人の男が兵士の警備の間を見て店に乱入し、万引の男を店の外に曳きずりだした。群衆は直ちにこの男におどりかかった。恐怖に脅えた連れの女は店のなかにあった公衆電話のボックスに身を潜め、そばにあったテーブルの上に民警の一人が立上り、ピストルを構えて女の安全を守る体制を採った。どっとなだれこんだ群衆は、この民警を曳きずりおろし、袋叩きに始めた。若い女も公衆電話のボックスから曳きずりだされ、店の外で群衆の激しい殴打を浴びた。群衆の一人が「なにを意気地のねえやりかたで止まっているんだよ」と懐からピストルを取り出して、男の胸に二発発砲した。数分後、女も同じように処刑された。サモスードの嵐は十月革命の前夜にかくもおぞましく吹き荒れたのである⁸²⁾。

このように荒れ狂うサモスードの復讐に脅威を感じた犯罪者が、新聞への投書という形で社会にたいして最後通牒をつき付けたことも興味のあることである。犯罪者は、「サモスードが終わるまでは、われわれは暗い道端で出会う誰をも見境なしに殺害し、家宅侵入の際はただ物盗りをするのみでなく、女子供を含む誰をもぶち殺してしまうであろう」と予告した⁸³⁾。あたかもペトログラードには労働者と資本家、農民と地主、兵士と将校の階

犯罪, 警察, サモスード

級闘争のほかに、犯罪者と堅気の世界とのもう一つの「階級闘争」があったかのようである。

サモスードは忍び寄る犯罪の危険をひしひしと感じ、犯罪を防止しえない民警と新しい刑事司法制度に愛想をつかし、憤りを感じていた民衆の鬱積した内的不満の爆発である。とるにたらぬ小さな罪を犯したものにまで死罪という正義の鉄槌を下したことは、民衆がたんに犯された犯罪に対する正当な懲罰以上のことを望んでいたことを示している。人々のなかには誰にむけていいか分からないドス黒い憎悪と復讐のパッションが渦まいていた。このパッションはサモスードをはげぐちとして表面にほとぼしる機会を見出したのである。サモスードは社会秩序と権威の崩壊の兆候であり、またそれ自体秩序と権威の一層の崩壊過程に拍車をかけたのである。

IV. 犯罪の社会学

革命下のペトログラードに起こった犯罪は社会的な文脈で捉えられなければならない。たとえば犯罪の犠牲者とは一体どのような人々であったのだろうか。犯罪は富裕階級と下層階級との対立という文脈で捉えられるべきであろうか。言い替えば、犯罪は下層階級の抑圧者にたいする反逆と解釈されるべきであろうか。それとも、犯罪は階級の如何を問わず全ての市民を無差別に危険に陥れたのだろうか。一方で、犠牲者のみならず、犯罪者をも考慮しなければならない。どのような人々が犯罪を犯したのでであろうか。前科者と脱走兵が主たる犯罪者であったのだろうか。それとも、それまで犯罪には無関係であった部分が革命の混乱のなかで犯罪への積極的参加者に加わったのだろうか。また、犯罪の地域的分布も興味のある問題である。犯罪はペトログラードの全市にわたり一様に広がっていたのだろうか、それとも地域によって犯罪率の相違はあったのだろうか。このような問題に明確な結論を出すことは、現在利用できる資料からでは困難であるが、一応の仮説を立てておくことは無駄ではないであろう。

大衆新聞を読んでみて直ちに分かることは、報道されている犯罪やサモスードが、カザン、ロジデストヴェンスキー、アレクサンドル＝ネフスキー、コロメンスキー、モスクワ、ナルヴァ地区などの市の中央部に集中していることである。これらの地区は裕福な特権層と下層級が雑居しており、また工場労働者は極めて少なかった。犯罪がこの地区に集中していることは、大衆新聞の読者層が主にこのような地区に住んでいた中流階級や下層階級から成り立っていたこととも関係があるかも知れない。したがって、市の中心から遠く離れた労働者地域での犯罪は、大衆新聞に報道されなかったということもありうることである。

しかし、犯罪やサモスードの都心への集中は、大衆新聞のバイアスからだけで説明することはできない。それは恐らくロシア革命の下での犯罪の社会学と無関係ではなかったであろう。犯罪によって最も直接的に影響を蒙った層が二つある。都心部はこの二つの層が密集していた場所であった。第一は、盗まれるべき財産を所有していた富裕層である。革命が起こってからまっさきにペトログラードを逃げ出したのはこの層である。しかし全てが逃げ出した訳ではなく、首都に残った富裕層は犯罪率の上昇を最も危険に感じていたに

違いない。この層で一つ興味のあることは、あたかも迫り来る自己の階級の没落を感じているかのように、特権階級の一部は売春や賭博や麻薬にあけくれる頹廢的な快樂に溺れきった社会を形成したことである。勿論このような社会は犯罪の社会と紙一重であった。クレロ殺人事件はその象徴的な現れであった。

第二に、組織された労働者運動の外に置かれた様々な職業から成る都市の下層階級も、犯罪の影響を蒙った層である。これには収入は低い意識の上では中産階級に近い最下位の官吏、中小商人、薬剤師、食堂、酒場、茶屋の所有者などがある。これに小さな工場の労働者、大工、清掃業労働者、水道工などの労働者や、靴屋、時計工、洗濯屋、錠前屋、ペンキ屋などの職人層、女中、下男、門番、守衛、店員、給仕、女給、洗濯婦などが加わった⁸⁴⁾。これらの下層階級は日夜犯罪と接近した場所に生活の場を持ち、彼ら自身いろいろな犯罪の犠牲者になったことが考えられる。さらに犯罪の影響を考慮するとき、家庭や町なかで犯罪に接触する機会の多かった主婦も忘れる訳にはいかない。これらの下層階級は教育程度が低く、革命によって転倒した価値観に混乱し、明確な階級意識で結ばれることもなく、また階級的組織によって組織されることもなかった。大衆新聞は犯罪に脅かされたこの層の恐怖と怒りを表現していたと思われる。恐らくサモスードを行った民衆はこの層であったのだろう。彼らは同時にもっとも反動的であり、また急進的でもあった。一方で反ユダヤ主義をあからさまにし、ユダヤ人に対するポグロムに参加したのもこの層であり、他方この層の一部はベトログラード・ソヴェトを支持して、特権階級に対する激しい憎悪を剥き出しにした。おそらく下層階級に属する若者は、急速に犯罪の予備軍に組み込まれていったと思われる。

次に重要なグループは兵士であった。兵士の犯罪に対する役割には二重の性格があった。一方では、兵士は混乱した社会のなかで犯罪に対処できうる究極的な権威であった。しかし他方では兵士は犯罪に積極的に参加したグループでもあった。おそらくコルニエロフ事件以後ベトログラードに駐屯していた予備軍には、著しい士気の低下と規律の崩壊が進行しており、政治的にまとまりを維持していた少数の部隊を除いては、兵士は急速に犯罪予備軍に転化していったのではないかとおもわれる。

ベトログラードにおける他の階層と比較してみれば、労働者階級のみが社会的にも政治的にも一番のまとまりを示していたといえる。犯罪との関係で見れば、最も大切なことは労働者階級が労働者の規律をひきしめ、労働者地区において犯罪の防止を保証すべき効果的な組織を維持していたということである。犯罪は恐らく工場地帯にも広がり、労働者もその被害から免れなかったと思われるが、犯罪率は市の中心地と比較すればかなり低かったであろう。労働者の組織のなかで犯罪の防止に役立った組織として、工場委員会、地区ソヴェト、そして最も重要な労働者民警と赤衛軍があった。労働者民警と赤衛軍の主要な任務は先にも述べたように反革命との闘争であったが、労働者民警は（後には赤衛軍も）労働者地区において公共の秩序を維持する役割も果たしたのである。例えば、ヴァシリエフスキー地区ソヴェットの民警委員会は、労働者民警の役割のなかに「生命と財産の保障」と「殺人、強盗、窃盗の摘発」を含んでいる⁸⁵⁾。ウェイドが指摘しているように、赤衛軍の起源は反革命の攻撃に備えて労働者を武装させることであった。しかし、ヴァシリ

エフスキー地区ソヴィエトで採用された「労働者親衛隊」規則の原案には、「性別、年齢、民族の如何を問わず全ての市民の生命と財産を保障する」という項目がその役割の一つとして認められていることは興味深いことである⁸⁶⁾。

七月事件の後、臨時政府は中央集権的原則の下に民警の再編成を目指した新しい民警の規則を発令して、労働者民警を廃止しようと企てた。しかしこの試みは失敗におわり、労働者民警はその存在を維持した⁸⁷⁾。このことは恐らく、労働者民警は公共の秩序を保つために最も効果的な組織であり、またある地区においては唯一の組織であったことと関連しているのであろう。例えば、労働者民警には給料を支払わないようにという臨時政府の命令にも拘らず、ペトログラード・パイプ工場の使用者は、労働者民警の廃止は工場の規律と警備を危険に陥れるとして、この命令に従うことを拒否した⁸⁸⁾。

市＝民警が無力化すると共に、労働者民警と赤衛軍は単に労働者地区のみならず、市の中央部においても秩序の維持に重要な役割を果たし始めた。市の最も危険な犯罪地帯であったリテイヌィ、ロジデェストヴェンスキー、アレクサンドル＝ネフスキー、モスクワ地区を含む第一地区ソヴェトは、犯罪問題を自己の課題とすることを余儀無くされ、八月には悪名高い「オリンピア」を閉鎖する決定を下し、リーゴフキやその他の危険地帯に労働者民警のパトロールを増やす決定を行っている⁸⁹⁾。

十月革命が差し迫ってくると、地区の労働者運動の指導者たちの間で、労働者民警と赤衛軍の役割を反革命に対する闘争という政治的目的のみに制限すべきか、それともそれぞれの地域での公共の秩序を維持する役割も果たすべきかという問題が激しく討論された。一般的にいて、ヴィボルグ、ヴァシリエフスキー、ペテルホーフ地区ソヴェトは、労働者民警と赤衛軍が労働者階級の階級闘争の道具であるから、他の階級をも利するような秩序の維持に労働者の武装組織は使用すべきでないという意見であった。この意見はボリシエヴィキ党の中央の意見と一致していた。これにたいしペトログラード、ロジデェストヴェンスキー、第一地区ソヴェトは、公共の秩序の維持も必要な役割の一つであるという態度を採った⁹⁰⁾。このような意見の相違にも拘らず、実際にはどの地区においても、程度の差はあれ、労働者民警と赤衛軍は秩序の維持という役割を果たしていたのである。

V. 結論

ロシア革命の過程において、公共の秩序と市民の安全を保障すべき公的な暴力機関は崩壊しつつあった。その結果暴力が野放しになり、公的暴力と私的暴力との差異が抹殺された。究極的制裁手段 (*ultima ratio*) を欠く政治体制には、法統治は不可能であり、社会の紛争解決の唯一の手段があからさまな暴力になることは必然的であった。公的暴力機関の崩壊、私的暴力機関の独立性、紛争解決の主要な手段となった暴力という互いに結び付いている三つの要素は、社会の暴力化の重要な兆候であった。さらにこのような社会の暴力化は、個々の市民の心理的残忍化 (*brutalization*) をもたらしたことも忘れてはならない。犯罪はこの点で政治と社会とを結び付ける接点であった。

犯罪は1917年におけるペトログラードの社会の崩壊によってもたらされた必然的な結果でもあり、また同時にこの崩壊の過程を促進せしめた要因でもある。犯罪の増大をもたら

した直接的な要因として先に述べたような様々な要因が挙げられるが、さらに人々の意識の中に起こった重要な変化が考慮されなければならない。パステルナークは『ドクトル・ジヴァゴ』のなかで、ロシア革命には二つの革命が並行して行われたと言っている。第一の革命は個人の外部に起こっていた政治的、社会的革命であり、第二の革命は個人の意識の中で起こっていた革命である。ツァーリズム体制が打倒され、それと共に旧世界のあらゆる価値が疑問に付され、その多くが排除された。凄まじい勢いで変わっていく社会的、政治的変動の中で古い善と悪の観念が混乱し、合法性と犯罪性の違いが曖昧になった。階級的対立が激化すると共に個人財産と生命の不可侵性が攻撃された。また階級的憎悪を煽り立てる政治的イデオロギーもこのような傾向に拍車をかけた。さらに革命の過程においてそれまで社会の下積みに置かれた民衆は、抑圧者のくびきから解放され、自己の運命に対する主人であるという自信と誇りを持つに至った。しかし、この自信と誇りは過去の抑圧者をも包摂する人間性に満ちているというより、むしろ抑圧者に対する憎悪と復讐の精神に力点が置かれていた。このような価値観の転倒、心理的態度の変化が犯罪の擡頭にいかに作用したかは困難な問題であるが、全く関係が無かったとは決して断言できない。

ロシア革命下のペトログラードは、ホブズの定義する「自然状態」とあまり隔っていない社会であったといえるが、このような社会が長続きするはずが無かった。社会の暴力化に勝る暴力手段をもって社会秩序の回復を目指すリヴァイサン国家の誕生は、ある意味で必然的であったといえる。

革命の過程で他の階層がバラバラに崩壊しつつあるなかで、たったひとつ労働者階級のみが政治的、社会的な結び付きを維持していた。マルクスは『ヘーゲル法哲学批判』序文の中で、ドイツの革命におけるプロレタリアートの役割について次のように述べている。

「ドイツにおける解放の可能性はそれではどこにあるのであろうか。我々は以下のよう
に答えるであろう。急進的な鎖を持った階級、市民社会の階級ではない市民社会における
階級、あらゆる階級の解消である階級、その苦しみが普遍的であるがゆえに普遍的な性格
を持ち、それに対してなされた不正が特殊な不正ではなく不正一般であるがゆえに特殊な
矯正を求めない社会の領域、その様な階級が形成されなければならない。伝統的な身分を
要求するのではなく、人間的身分のみを要求し、ドイツの政治体制の特殊な結果に反対す
るのではなく、その政治体制そのものに全面的に反対し、最後に自己を社会の他のあらゆる
領域から解放することなしに自己を解放することができない。ということはつまり人間
性の完全な喪失であり、人間性の完全な救済を通じてでなければ自己を救済することので
きないそのような領域が社会に形成されなければならない。特殊な階級としてこのような
社会の解消を行うのがプロレタリアートである。」⁹¹⁾

プロレタリアートの役割に関してロシア革命はマルクスの予見が正しいことを証明した。公共の秩序という自己の階級を超越した社会全体の課題を達成するのは、労働者階級以外には有りえなかったであろう。したがって、この観点から見れば、十月革命は単にポリシェヴィキ党による偶然的な権力の奪取ではなく、社会的必然性に裏付けられていたといえることができる。

しかし「歴史の狡猾さ」は、ロシア革命の過程があまりにも見事にマルクスの予見を実

現したが故に、マルクス主義の危険な限界をしめし、逆にヘーゲルの思想の偉大さを証明しているのである。ペトログラードの労働者は確かに社会の全ての苦しみと不正を一身に担って行動した。しかし、彼らを行動へと駆り立てたパッションは、単に抑圧からの解放というあかるい前向きのパッションであるのみならず、階級の敵に対するドス黒い憎悪と復讐のパッションでもあったのである。市民社会の単なる一部をなす労働者階級が、ヘーゲルにあっては市民社会の諸階層の利害を調停する役割を果たすべき国家にとってかわる時、このような否定的なパッションも制度化されざるをえなかった。

この階級的憎悪の制度化という過程は、プロレタリアート独裁のもとに自己の独裁的権力を確立していったボリシェヴィキ党によって、意識的に推し進められた。ボリシェヴィキ党は国家による市民社会の破壊を遂行し、プロレタリアートの名のもとに自己を国家の座に据え付たのである。そしてこの目的を達成する上であらゆる暴力の行使が正当化された。犯罪もこの一環として考えることができる。犯罪は十月革命によって減少するどころか、むしろ増大した。それまで犯罪に関しては無関心であったボリシェヴィキ権力は、権力を奪取してからは犯罪をプロレタリア権力に対する反革命行為であると規定して、犯罪対策を自己の抑圧的暴力機構の設立のための跳躍台としたのである。しかし、この過程については章をあらためて論じなければならない。

— 注 —

- 1) 西欧におけるロシア革命についての新しい研究については、Ronald Grigor Suny, "Toward a Social History of the October Revolution," *American Historical Review*, 88 (1983), pp. 31-52 に紹介されている。
- 2) *Ibid.*, pp. 33-34, 51-52.
- 3) 例えば最近の研究である Rex A. Wade, *Red Guards and Workers' Militias in the Russian Revolution*, Stanford, Stanford University Press, 1984 を取り上げてみよう。これは労働者民警と市＝民警との関係と、赤衛軍の創立を呼び起こした労働者階級の急進化を分析している点では優秀な研究である。ウェイドのアプローチはまさにスーニーが提唱している政治と大衆運動の結び付きを明らかにする事である。しかし犯罪という視野がまったく分析の対象から外されているために、政治がいかに犯罪問題までにも係りあっているかという観点が全く抜けてしまっている。
- 4) このような大衆新聞を利用した研究としては次のものがある。Jeffrey Brooks, *When Russia Learned to Read: Literacy and Popular Literature, 1861-1917*, Princeton, Princeton University Press, 1985; Louise McReynolds, "Images of Crime in the City: Crime Reporting in the St. Petersburg Tabloid Gazeta Kopeika," a paper presented at the AAASS meeting, November, 1984, Washington D. C.; Joan Neuberger, "Hooliganism and the Mirovoi Sud in St. Petersburg, 1900-1914," A Doctoral Dissertation, Stanford University, 1985.
- 5) 1914年の半ばにペトログラードの人口は郊外も含めて2,103,000。1915年の末には 2,347,850, 1917年初めには 2,420,000と増加した。しかし二月革命以後人口は減少し, 1917年の秋には2,30

- 0,000になった。最も著しい減少は十月革命後に起こり、1918年の6月には1,468,000にまで減少した。З. Г. Френкель, *Петроград периода войны и революции : санитарные условия и коммунальное благоустройство*, Петроград, 1923, стр. 9-13, 実際には第一次世界大戦中の犯罪率の変化はもう少し複雑であって、大戦の勃発後著しく減少した犯罪率は1916年後半再び増加する傾向をみせた。特に青少年犯罪率の増加が顕著であった。この犯罪率の上昇が二月革命以降の犯罪率といかに関係しているかは、さらに研究されなければならない問題である。
- Е. Н. Тарновский, “Война и движение преступности в 1911-1916 гг.,” *Сборник статей по пролетарской революции и праву*, Петроград, 1918, стр. 100-104; М. Н. Гарнет, *Революция, рост преступности и смертная казнь*, Москва, 1917, стр. 2.
- 6) ЦГАОР, Ф. ДПОО, д. 341, (п. 57/1917, лл. 24, 29. Tsuyoshi Hasegawa, *The February Revolution: Petrograd, 1917*, Seattle, University of Washington Press, 1981, p. 289.
- 7) Hasegawa, *The February Revolution*, pp. 287-88.
- 7a) А. Б. Пешехонов: “Первые недели”, *На чужой стороне*, I (1923), стр. 292-293.
- 8) ユレーヴィッチの命令については, *Петроградская Газета* (以下 ПГ と略) 1917年3月5日。強制捜査を装った強盗については*Петроградский Листок* (以下 ПЛ と略) 1917年3月5日, 16日, 17日, 21日, 26日, 28日, 4月28日, ПГ, 1917年3月8日, 3月19日を見よ。
- 9) ПГ, 1917年3月16日。
- 10) ПЛ, 1917年4月7日, 20日, 23日, 25日, 5月9日, 17日。
- 11) ПЛ, 1917年6月17日。他の窃盗, 強盗については, ПЛ, 1917年4月27日, 29日, 5月10日, 17日, 18日, 19日, 21日, 6月8日, 9日, 17日を見よ。「首都の盗み」は最初に4月26日のПЛに現れた。*Газета-Копейка* (以下 GK と略) によると6月15日に起こった窃盗, 強盗の数は60であった。GK, 1917年6月16日。
- 13) GK, 1917年7月7日, ПЛ, 1917年7月6日, 11日。
- 14) GK, 1917年7月28日。他の窃盗, 強盗については ПЛ 1917年7月16日, ПГ, 1917年7月16日。
- 15) ПЛ, 1917年8月17日, ПГ, 1917年8月15日。
- 16) GK, 1917年8月30日。
- 17) 9月の窃盗, 強盗については GK, 1917年9月2日, 6日, 7日, 9日, , 1917年9月12日, 14日を見よ。
- 18) ПЛ, 1917年10月1日, 14日, 18日, ПЛ, 1917年10月3日, 4日, 8日。
- 19) GK, 1917年9月11日, 12日, 14日, 17日, 19日, 20日; ГЛ, 1917年10月4日。
- 20) Alexander Rabinowitch, *Prelude to Revolution: the Petrograd Bolisheviks and the July Uprising*, Bloomington, Indiana University Press, 1968, pp. 64-66; Michael M. Boll, *The Petrograd Armed Workers' Movement in the February Revolution*, Washington D. C., University Press of America, 1979, pp. 146-152.
- 21) GK, 1917年4月29日, 5月7日, 20日, 21日, 30日。
- 22) ПЛ, 1917年4月23日。
- 23) ПГ, 1917年7月20日, 21日, 25日, 8月30日; ПЛ, 1917年8月6日, 17日。
- 24) ПГ, 1917年8月12日, 13日。
- 25) S. A. Smith, *Red Petrograd: Revolution in the Factories, 1917-1918*, Cambridge, Cambridge University Press, 1983, pp. 168-171; David Mandel, *The Petrograd Workers and the Soviet Seizure of Power: from the July Days 1917 to July 1918*, London, Macmillan, 1918, p. 264-286.

犯罪, 警察, サモスード

26) *Весь Петербург* に伝えられている殺人の件数は次ぎのとおりである。

	ベテルブルグ	郊外
1896	117	10
1899	127	17
1900	178	11
1901	173	17
1902	156	16
1903	206	24

この数字は Joan Neuberger 氏からの情報による。

- 27) ПЛ, 1917年3月11日; *Речь*, 1917年3月11日。
- 28) ПЛ, 1917年4月17日, 20日; ПГ, 1917年4月18日。シュリッペンンのジートフスキー邸収奪は GK, 1916年11月4日, 16日, 20日を見よ。
- 29) ПЛ, 1917年5月19日。
- 30) ПЛ, 1917年5月19日。
- 31) ПЛ, 1917年8月29日。
- 32) ГК, 1917年8月12日, 13日。
- 33) ПЛ, 1917年5月3日。
- 34) ПЛ, 1917年10月2日, 4日。
- 35) ПЛ, 1917年7月13日。
- 36) Lewis Siegelbaum, "Another Yellow Perill? Chinese Migrants in the Russian Far East and the Russian Reaction before 1917," *Modern Asian Studies*, 12, No. 2 (1978), pp. 307-30; Вестник городского самоуправления, 1917年7月4日。
- 37) ПЛ, 1917年4月25日, 5月2日; ПГ, 1917年7月26日。
- 38) ПЛ, 1917年9月23日。
- 39) К. И. Глобагев, *Правда русской революции: Воспоминания бывшего начальника Петроградского охранного отделения*, Unpublished Manuscript, Bakhmeteff Archives, Columbia University, стр. 131-132.
- 40) Robert P. Browder and Alexaznder F. Kerensky, *The Russian Provisional Government 1917: Documents*, 3 vols. Stanford, Stanford University Press, 1961, vol. 1, pp. 199-200.
- 41) ПЛ, 1917年3月18日。
- 42) Глобчев, *Правда русской революции*, стр. 117-118.
- 43) ПЛ, 1917年4月24日。
- 44) ПЛ, 1917年7月28日。
- 45) ПЛ, 1917年3月10日, 16日, 22日, 30日。
- 46) ПЛ, 1917年7月26日, 8月24日; ПГ, 1917年7月26日。
- 47) ПЛ, 1917年7月26日, 27日, 29日, 8月24日; ПГ, 1917年7月26日; ГК, 1917年8月5日, 8日, 20日。
- 48) ПЛ, 1917年7月25日; ГК, 1917年7月25日。
- 49) Leonard Schapiro "The Political Thought of the First Russian Provisional Government" in Richard Pipes ed., *Revolutionary Russia*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1968, p. 113.

- 50) Browder/Kerensky, *The Provisional Government*, vol. 1, p. 220.
- 51) 臨時裁判所については В. Манушкин, “Временные суды в Петрограде” *Журнал министерства юстиции*, No. 4, 1917, стр. 184-192. 臨時裁判所の規則については там же., стр. 184-192. 臨時裁判所に対する反応については ПЛ, 1917年 8月 8日を見よ。
- 52) Манушкин, “Временные суды,” стр. 188.
- 53) там же., стр. 189.
- 54) ПЛ, 1917年 5月22日。
- 55) ПЛ, 1917年 5月 9日, 16日, 17日。
- 56) Browder/Kerensky, *The Provisional Government*, vol. 1, p. 205-206.
- 57) Глобачев, *Правда русской революции*, стр. 124.
- 58) ГК, 1917年 8月31日; ПЛ, 1917年 8月31日。他の脱走については ПЛ, 1917年 7月 2日, 8月 2日, 9日; ГК, 1917年 7月27日を見よ。
- 59) Tsuyoshi Hasegawa, “The Formation of the Militia in the February Revolution: An Analysis of the Origins of the Dual Power,” *Slavic Review*, 32, No. 2 (1973) pp. 303-322; Wade, *Red Guards and Workers' Militias*, Chs. 2, 3.
- 60) 1917年の革命の過程に現れた二つの相対する政治的原則, 即ち民主的原則と階級的原則, さらに後者の前者に対する勝利は重要な問題であるがまだあまり研究されていない問題である。しかしこの問題に対する示唆は, Rosenberg, Raleigh, Wade, Startsev によってなされている。
- 61) Wade, *Red Guards and Workers' Militias*, pp. 64-65.
- 62) 地方分権制の原則はロシア革命の過程で現れたもう一つの重要な原則であるが, これもあまり研究されていない問題である。これについては Raleigh の新著, Donald J. Raleigh, *Revolution on the Volga: 1917 in Saratov*, Ithaca, London, Cornell University Press, 1986, を参照。
- 63) Wade はツェレテリの民警の中央集権化の試みに対する労働者民警の抵抗を叙述しているが, この試みは同時に市=民警からも大きな反対を呼び起こした。Wade, *Red Guards and Workers' Militias*, pp. 124-126. 市=民警からの反対については, *Вестник городского самоуправления*, 1917年 7月19日, 20日, 21日, 25日, 29日, 30日, 8月 2日, 4日, 8日, 11日, 22日を見よ。
- 64) З, Кельсон, “Милиция февральской революции,” *Былое*, 29, №. 1 (1925) стр. 163.
- 65) ПЛ, 1917年月 1日; ПГ, 1917年 4月13日。
- 66) ПЛ, 1917年10月19日。
- 67) 市=民警警官の要求は地区ソヴェトや工場委員会で討議された。*Районные советы Петрограда в 1917 году: протоколы, революции, постановления общих собраний и заседаний исполнительных комитетов*, 3 тома, Москва/Ленинград, 1964, (以下 РСР), том 2. стр. 278; *Фабрично-заводские комитеты Петрограда в 1917 году: протоколы*. Москва, 1979, стр. 456-459, 605 を参照。
- 68) ГК, 1917年 9月28日, 19月 5日, 7日。
- 69) ПЛ, 1917年 5月14日, 19日, 29日, 30日, 6月 2日。市ドゥーマでの討議については ПЛ, 1917年 5月11日。
- 70) ПЛ, 1917年 9月12日, 14日, 17日, 19日, 20日, 22日, 10月 4日。
- 71) ПЛ, 1917年10月20日。
- 71a.) ГК, 1917年 7月14日; Френкель, *Петроград периода войны и революции*, стр. 13.

犯罪, 警察, サモスード

- 72) ПЛ, 1917年4月28日。
- 73) ПЛ, 1917年10月19日。
- 74) サモスードはロシアの犯罪の伝統に根ざしている。農村におきたサモスードの例については Валерий Чалидзе, *Уголовная Россия*, Нью Йорк, Хроника, 1977, стр. 22-32 を見よ。
- 75) ПЛ, 1917年5月13日。
- 76) ГК, 1917年6月25日。Гарнет, *Революция, рост преступности*, стр. 27-30; А. Аксий, “Самосуд: Письмо очевидца,” *Вестник городского самоуправления*, 1917年8月6日を参照。
- 77) ПЛ, 1917年8月20日。
- 78) ГК, 1917年7月9日。他のサモスードについては, ПЛ, 1917年7月20日, 26日, 8月2日, 3日, 10日; ГК, 7月9日, 8月3日, 19日を見よ。
- 79) ПЛ, 1917年7月16日; ГК, 1917年7月16日。
- 80) ПГ, 1917年7月16日, 29日; ПЛ, 1917年7月16日, ГК, 1917年7月16日。
- 81) 10月のサモスードについては ПЛ, 1917年10月2日, 4日, 5日, 7日, 8日, 10日, 11日, 12日, 17日を見よ。
- 82) ГК, 1917年10月16日。
- 83) ПЛ, 1917年7月9日。
- 84) 1910年の国勢調査によるとペトログラードには 234,000人の工場労働者, 77,000人のスルジャーシチエ, 52,000人の運輸労働者, 25,000人の給仕, 料理人など, 41,000人の市の職員, 58,000人の職人, 260,000人の女中, 下男がいた。
- 85) РСП, 1: 72; 3: 186, 189.
- 86) Ibid., 1: 135.
- 87) Wade, *Red Guards and Workers' Militias*, pp. 121-132. ツェレテリによって発令された民警規則案については, *Вестник городского самоуправления*, 1917年7月19日を見よ。
- 88) Wade, *Red Guards and Workers' Militias*, pp. 126-127.
- 89) РСП, 1: 225-226.
- 90) Ibid., 1: 234-236; 3: 120, 338; *Фабрично-заводские комитеты Петрограда в 1917 году*, стр. 390, 450, 491.
- 91) Robert C. Tucker, ed., *The Marx-Engels Reader*, New York, W. W. Norton, 2nd ed., 1978, p. 64.

Crime, Police, and *Samosudy* in Petrograd
during the Russian Revolution

Tsuyoshi HASEGAWA

Intended as the first step toward a social history of the Russian Revolution, this article seeks to examine how the sharp increase in the crime rate in Petrograd during the Russian Revolution in 1917 contributed to the breakdown of social cohesion in the city.

After the February Revolution the crime rate in Petrograd increased with frightening speed. Not only did the number of various crimes increase, but also crimes committed became progressively violent. Crimes resulted from, and at the same time further contributed to the general breakdown of social cohesion in revolutionary Petrograd. Criminal population, particularly ex-convicts freed from prisons, and deserters, poured into the capital. The Provisional Government issued decree after decree extending generous treatment to criminals. The criminal justice system under the Provisional Government did not function well to prevent crime. The Temporary Court was often arbitrary in passing sentences and generally lenient to criminals, while the discipline in the prison guard system became extremely lax.

Furthermore, the tsarist police was annihilated during the February Revolution, and the militia which replaced the former police was not effective in combatting crime. The militia organizations were divided into the city militia and the workers' militia. The city militia was based on the democratic principle, and controlled and financed by the Petrograd City Duma, while the workers' militia was an exclusive class organization designed to protect the interests of the working class and controlled by the district soviets. Both organizations had a strong commitment to the principle of local self-determination, resenting attempts at centralization.

As the crisis of the middle class intensified in the summer, the city militia became progressively ineffective. On the eve of the October Revolution, the demoralization of the city militiamen was such that it was on the verge of collapse. The workers' militia had to step into this vacuum to fulfill the task of insuring security.

People reacted to crimes in various ways. Those who could afford to leave deserted the city. Many residents formed residents' committees, and improvised their own security measures. Some even hired soldiers from nearby barracks. But the most frightening aspect of the Russian Revolution was the emergence of

samosudy in the streets. Those common citizens, who were threatened by the rising crime rate and frustrated by the powerlessness of the criminal justice system in preventing crime, vented their anger and frustrations by committing *samosudy* against common thieves caught in the streets. After the summer, *semosudy* began to bear an anti-Semitic character, often directed against Jewish merchants. *Samosudy* in turn contributed to further erosion of social coherency.

The rising crime rate was an inevitable result of the social breakdown in Petrograd that was progressing with tremendous speed, but at the same time it accelerated this process further. It also contributed to brutalization of the society.

Petrograd on the eve of the October Revolution was a society that was close to what Hobbes defined as a “state of nature.” A society that is reduced to anomie cannot exist for long, and it made the arrival of a “Leviathan state” inevitable. The only class that maintained social and organizational cohesion was the working class. If one considers that the great moving force that propelled this class to action was often a sense of revenge, and further that the Bolsheviks who were to seize power on the crest of the working class support were all eager to unleash class violence, it was clear that the nature of this “Leviathan state” would begin with the institutionalization of a system of violence in the name of proletarian dictatorship.